

音楽発表会…「飽きない」 その③ 2020. 3. 15

○高学年

五年生…中学年と同じ仲間意識がある。そのみんな意識、ステージ意識がよりでてくる。そして、「聞かせる」「聞いてもらう」という意識、みんなで歌う、演奏する意識の高まり。それが緊張ではなく、落ち着きを感じさせ、声が丸くなっているように感じた。

「耳で歌う」という感じ。仲間を声・音を聞きながら…歌う、奏でる。大事なことである。トーンチャイムは「教育的効果」は大きいなあ…と勝手に思う。

料理に例えると、低学年は「この料理、私、作ったんだよ。すごいでしょ」という感じ。

中学年は「この料理、私が作ったの。おいしいよ、食べてね」という感じ。高学年は料理そのものだけでなく、その香り、色合い、盛り付け、卓上花…そういうその場全体を作り上げているという感じがする。

六年生、さすがと思う。選曲がなるほどと思う。がらりと雰囲気を変える。人数が多いこともあるが、言葉がはっきりし、声のまとまりを感じ、客席を引き付ける。この「声のまとまり」がいい。総合芸術という表現があるが、ソロでなく、みんなで歌う・みんな奏でるといふ、よさというか特性といふか、伝わってくる。

六年生を聞いていて思う。低学年は「自分性」、中学年は「他人性」、高学年は「全体性」、それがほどよく表現されていたなあ。

ゴルフ下手のゴルフ評論家ならぬ音楽下手の「音楽評論」の全体結論でした。

(続く)



☆From the Andromeda☆